——第17回教育研究推進室ワークショップ

国立スラバヤ大学日本語科の日本語教育に携わって

スバンディ　　国立スラバヤ大学日本語科

司会者：本日は第17回の教育研究推進室ワークショップです。ワークショップには，主に教職員向けのワークショップと大学院生向けのワークショップがありますが，今回は大学院生向けのワークショップです。

文学研究科には留学生がたくさんいます。文学研究科で学んで博士号を取って，日本に残る人もいますが，母国に帰って大学などの教育機関で仕事をしている方も大勢いらっしゃいます。名古屋大学の文学研究科で学んだ人たちに，そのときの経験について，あるいは，その経験が母国に帰ってからどのように生きているのかについて，話してもらう機会があってもいいのではないかということで，今回は，言語学研究室の修了生で，今，国際交流基金の日本研究フェローとして日本に滞在しているスバンディさんに，文学研究科での体験，それから母国での経験を話していただきたいと思います。さらに，名古屋大学文学研究科に対するいろいろな注文も聞かせてもらえれば，そういったことを少しでもこれからの留学生教育に生かしていきたいと思います。

それでは，最初にスバンディさんにお話しいただいて，その後，お話の内容に対する質疑もそうですし，先ほど申し上げましたように，文学研究科における留学生教育の在り方についても意見を交換したいと思います。今日のお話のタイトルは，「国立スラバヤ大学日本語学科の日本語教育に携わって」ということで，スバンディさんは今，スラバヤ大学で日本語学科の講師を担当されていらっしゃいますので，スラバヤ大学でどういう教育をしているのかということも含めてご紹介いただければと思います。それではよろしくお願いいたします。

スバンディ：こんにちは。スラバヤ大学のスバンディです。よろしくお願いします。私，今日は，そんなに大したことを話すわけではないのですが，自分がどういう経験，どういう活動をしてきたのかについて話させていただきたいと思います。

私は，留学している間，家内と一緒に来ていて，2人とも奨学金をもらっていなかったんですが，子どもができて，交代で学校に行ったりしていました。自分でいろいろ本を読んだり勉強したりして，わからないところは必ず日本人の先輩たちに聞きました。修士課程のときは日本語学科に入って，博士課程から言語学に移ったのですが，日本語学科の宮地先生にはいろいろ勉強会とかをしていただきました。それ以外に，教育学部で教育のことについても勉強しました。なぜかというと，私の大学は，今は総合大学なのですが，そもそも教育大学だったので，やっぱり教育大学の特徴をうまく伸ばさなければならないという，みんなそういう気持ちがありますから，日本語学だけじゃなく日本語教育のことについても勉強しなければならないという思いがありました。

私は2004年の3月に帰国しました。インドネシアでどのような活動をしているのかを，まずインドネシアの大学での責務ということからお話したいと思います。（資料を指し示しながら）これが国立スラバヤ大学，こちらが言語芸術学部で，日本語学科はその学部の中にあります。

インドネシアの大学での基本的な責務ですが，大学

の講師には，まず教育と教授の責務があります。2番目は研究。教えるだけじゃなくて，やはり研究しなければならないということです。次は社会に対する貢献の責務。これは大学の外に向かって行う活動ということです。これが基本的ですが，それ以外にもまだあります。

では，どのような教育活動をしているかというと，授業のほかに論文の指導があります。卒業論文も指導しますし，今，私の大学には院生もいますので，修士論文も指導しています。

授業の方は，うちの大学ではだいたい2つに分類されます。まず義務的な科目。これは学生たちが必ず取らなければならない科目ですが，ただ取るだけではなく，合格しなければならないという条件があります。この義務的な科目の中では，道徳的な科目，これは多分中国の留学生には珍しいことではないかもしれませんが，日本人にはちょっと珍しいと思います。私も，ちょっと珍しいなと思いますが（笑）。道徳的な科目というのは，宗教とか国民教育といった科目で，私は，こういうことは個人的な問題だから，授業から外したほうがいいのではないかと思っています。ただ，インドネシア語やインドネシア文化基礎という科目ならメリットがあると思います。

そして，教育と関係がある授業ですが，これはさらに2つに分けられます。まず一般的な教育，これは理論的な授業なのですが，基本的には教育学部の先生が担当してくれます。教育心理とか教育基礎とかそういう科目です。もう一つは，日本語教育と関係がある科目ですね。これには日本語の教授法などがあります。赤くなっているのは，私がたまたま担当している科目です。日本語教授法とか日本語教育計画とはどういう科目かというと，日本語を勉強している学生たちは卒業したら高校とか中学校の日本語の先生になるので，日本語を教えるときにどんなことを用意しておかなければならないのか，基本的な教案やシラバスについてこの授業で話すわけです。

それから日本語教育実習があります。日本語教育実習1と2があるのですが，1のほうは，半分は理論的，半分は実践的に，どういうふうに学生たちが日本語を教えるのかを学びます。私は，留学している間に，名大の教育学部の的場先生の『授業研究』という授業に出たことがあります。その授業は『Lesson Study』という名前でしたが，その授業に基づいて教えてみたらどうかなと思い，実際にやってみました。実際の授業の様子をご紹介しましょう。

（映像を見せながら）これは，筑波大学で特殊教育を研究されている中田英雄先生と一緒にインドネシアでやった研究授業です。こういう資料を学生たちに見せながら，授業をやるときにはどんなことを用意しなければならないか，どんなことを準備しておかなければならないか，授業をやるときにはどのような雰囲気で，どのような流れを作らなければならないかを，私が学生に説明します。日本語教育実習2の方は，学生たちがそれぞれの高校や中学校に行って，2カ月半ぐらい教育実習をやっています。

科学的な科目と技能的な科目というのもあります。技能的な科目というのは，日本語能力の育成と関係がある科目ですね。日本語1から日本語8まであって，日本語1から3までは『みんなの日本語1，2』を使っていますが，日本語4から5までは中級レベルなので，国際交流基金が出版した『中級日本語』という教科書を使っています。そして日本語6から8は上級のレベルなので，新しい『New Approach』という教科書を使っています。

表記，これは漢字のことですね。表記1から表記7まであります。私が担当しているのは，表記1－2と6－7と，話し方の3と4です。1，2は1年生の前期と後期にやりますが，1，2のときが一番難しいですね。なぜかというと，学生たちは日本語を初めて勉強するので，漢字を覚えやすくするために，いろいろ工夫しなければならないからです。私は，漢字を覚えやすくするためにちょっと操作をしました。例えば，漢字の「数える」にはどのような要素があるか。「米」と「女」からできている漢字なので，米と女はどういう関係かを想像すると，女は米と近いから，ご飯を作るのは女だから，「米を女が数える」と覚えればいいと，そういう覚え方を勝手に教えているのです。学生たちにも，漢字を覚えやすくする方法を自分で考えてもらっています。週末には必ず小テストをやります。その小テストの後に，今までどのような漢字を覚えたのか，どんな漢字を勉強したのかを学生たちに発表してもらっています。

（資料を指し示しながら）これは学生たちの発表です。ときどき私にも読めない漢字がでてきます（笑）。例えば，この漢字はどういう書き順か，訓読みは何か，音読みは何かなど，学生たちにいろいろと調べてもらいます。

話し方の3と4は3年生と4年生です。これは日常的な会話や仕事と関係がある会話なので，私がビデオを見せたりカセットテープを聞かせたりして，新しい

文法や新しい語彙がある場合には私がそれを説明して，学生たちに覚えてもらいます。その後は，学生たちに会話文を作ってもらって，それを録画して，録画したものをまた学生たちに見せて話し合います。そして，どんな問題があるのかをいろいろ話し合います。私が話し方の授業を担当するときには，スラバヤにいらっしゃる日本人の奥さんたちを集めて，ボランティアをお願いしています。たまたまなのですが，（資料を指し示して）この 3 人は名古屋大学と関係がある人たちです。お互い名古屋大学とは心理的なつながりがありますから，いろいろ応援してもらって，週 1 回ぐらい，この人たちにいろいろ手伝ってもらっています。一番奥の方は，スラバヤにある日本人学校の校長先生の奥さんです。この日は料理がテーマで，どういうふうにインドネシア料理を作るのか，どんな材料を使うのか，さっきのボランティアの日本人の奥さんたちに説明しながら料理をして会話をしました。こういう授業をやるときは，できるだけ周りにいらっしゃる人たちに応援してもらうのがいいと私は思っているので，ネットワーク作りを心がけています。

（資料を指し示して）これも話し方の授業です。学生たちが 3 人くらいのグループを作って会話をします。その会話を録画して，録画したものを見ながら，このグループの会話はどうだろうとみんなで話し合って，ちょっと足りない部分があれば，ほかの友達からいろいろ意見やアドバイスをしてもらっています。

次は科学的な科目です。これは理論的な科目です。この科目には，日本語学概論，音声学，統語論，社会言語学，日本語の語用論，日本語の単語分析などがあります。青くなっているのは私が担当している科目です。最初は学生たちに理論的な説明をして，その理論を研究や卒業論文を書くときにどのように使うのか，具体的な例をあげていきます。その後，学生に発表などをしてもらいます。ある学生は日本のドラマを研究対象にしています。これはコマーシャルと関係があるテーマです。ドラマや映画やマンガを対象に卒業論文を書くのが一番多いと思います。

さて，ここまでは義務的な科目ですが，他に選択科目があります。基本的に教育大学なので卒業後は高校とか中学校の先生になるわけですが，最近は先生になる機会もそんなにあるわけじゃないし，東ジャワに日本企業がだんだん入ってきたので，ビジネスと関係がある科目も出したほうがいいのではないかと考えて，結局このような選択科目を作ることにしました。コンピュータというのは日本語の使い方ですね。そんなに難しいプログラムじゃなくて，平仮名を入力するときや漢字変換するときにはどういうふうにするのか，そういったことですが，インドネシアの学生たちにとってはとても難しいことなので，勉強しておかないと会社などで仕事をするときに困ってしまいます。

もちろん，講師の責務には，研究と関係がある仕事もあります。基本的に一番ポイントが高いのは，自分の専門と関係がある研究論文や発表です。研究をしないと，自分のキャリアがなかなか上がりません。私は2005年からいろいろチャレンジしていて，2006年から今年までインドネシアの文部科学省の研究費をとりましたし，今年はたまたま国際交流基金の研究フェローもとることができました。今年は二つ研究費を取ってしまって，逆に困っています。なぜかというと，両方とも研究報告書を出さなければいけません。こちらは日本語で，向こうはインドネシア語で。インドネシア語は多分 1 週間ぐらいですぐ書けると思いますが，日本語のほうはちょっと時間がかかりますので（笑）。

それから，社会的な貢献をするという責務ですね。これはさっき言いましたように，大学の外における活動です。私は日本語を専攻しているので，中学校とか高校の日本語の先生たちと一緒に，日本語教育がどうすればよくなるのかを考える活動をしています。インドネシアの普通のインドネシア人の中にも日本に関心を持っている人が結構いるので，そういう人たちに日本語の基礎や日常会話的なあいさつ，日本文化や日本料理などを教えたりしています。逆に，さっきも言いましたように，スラバヤにいらっしゃる日本人たちにもインドネシアの基本的な文化や料理などを教えています。それから，高校や中学校の先生だけじゃなくて，東ジャワにある大学，日本語を教えている大学の先生たちと一緒にインドネシア日本語教育学会という学会を作って，2004年から東ジャワ支部長をやっています。どうすれば日本語教育や日本学を豊かにすることができるのか，みんなでいろいろ考えながら活動しています。

日本語教育学会の活動は日本の国際交流基金にサポートしてもらっています。初等教育の教師に対する教育，教授法の指導といった活動です。さっき言いましたように，私は名古屋大学の教育学部の的場先生のところで授業研究を勉強させていただき，それをインドネシアに持って帰りました。インドネシアの小学校の先生たちや中学校の先生たちのレベルは，今のままではなかなかアップできないので，レベルアップするために授業研究をやってもらおうと思って，小学校の先

生たちや中学校の先生たちと一緒に授業研究をやっています。東ジャワ教育省とスラバヤ市教育省の初等教育の開発プログラムもやらせていただいていて，去年は，どういうふうに東ジャワの教育をよくするかというプログラム―― Grand Design of Education という名前ですが――のチームに入っていました。

（資料を指し示しながら）これは小学校，中学校の先生たちと一緒に授業研究をやっているところです。2006年には日本JICAと一緒に西ティモールに行って，そこの先生たちと一緒に授業研究をやってきました。これは日本語教育学会です。去年，国際セミナーとワークショップをやりまして，日本国際交流基金の専門家の方に来ていただきました。また，ジャカルタの日本国際協力機関の専門家と私が発表をしました。これは東ジャワで国際セミナーと国際ワークショップをやったときの写真です。この人たちは東ジャワの大学の先生たちです。真ん中はナンダム先生といって，インドネシア日本語教育学会の本部長です。こちらは西部ジャワの国際交流機関の専門家，こちらは私のところにいらっしゃる専門家，あとは他の大学の先生たちです。

私は2004年にインドネシアに帰って，2005年から今年の2月まで日本語学科長をやっていたのですが，これがやっぱり一番大変でした。2度としたくないです（笑）。苦しくて。本当に大変でしたね。多分，町田先生はよくご存じと思いますけど，毎日必ず学校に来なければならないし，朝早くから夜遅くまで学生たちの相談に乗らないといけません。今年の2月にやっと終わって，よかったと思いました（笑）。日本語学科長が終わったあと，今度は言語芸術学部教育開発センターのセンター長になったのですが，国際交流基金のフェローを取って日本に逃げてきたのです。本当に助かりました（笑）。さっき言いましたように，インドネシア日本語教育学会の東ジャワ支部長もやっているのですが，これもちょっといい加減で，学会の仕事は副会長にやっていただいています。だいたいそういう感じで大したものじゃありませんが，以上です。

司会者：ありがとうございました。日本語教育は国によって違いますので，そのあたりも興味深いと思います。今のお話に対して質疑応答，意見交換をしたいと思うのですが，その前に，名古屋大学で勉強されていたときのことについて，何か一言ありませんか。

スバンディ：そうですね。私は，修士論文と博士論文は意味論について書きました。換喩的な意味を表す複合名詞，例えば「渡り鳥」などは，季節によって移動する鳥だけじゃなくて，「決まった仕事をしていない人」や「住む所がない人」という意味も表します。そういうことを論文に書きました。でも，留学している間に，社会言語学や日本語の語用論についてもいろいろ勉強しました。今教えている学生の卒業論文は，社会言語学や語用論をテーマにしたものが増えています。ですから，日本で勉強したことは，今学生を教えるときにやっぱり役に立っています。私の大学は日本語学科ですが，日本語だけを教えているわけではなく，やっぱり言語学，特に日本語学と関係がある理論的な科目もありますから。私の大学の日本語学科の先生たちともいろいろ話しているのですが，できれば，町田先生や佐久間先生に年に1回くらいいらしていただいて，講演や集中講義のようにやっていただけたらいいなと思います。

司会者：スバンディさんが日本に最初に来たのは何年でしたか？

スバンディ：最初に来たのは1997年です。2004年の3月に博士後期課程を終わって帰国して，今年の6月にまた来日しました。

司会者：では，ここから意見交換に移りたいと思います。今の話についてでも構いませんし，文学研究科がらみのことでも構いません。

Q：多分，今日お伺いしたいというか，出席していただいている方とお話ししたいことは，大きく分けて2つあると思うんですね。1つはスラバヤ大学で，スバンディさんがここで勉強した成果をどういうふうに生かしていらっしゃるのか。今，授業のお話を伺いましたけど，併せて，少しスラバヤ大学が置かれている状況についても伺えればと思います。教育というのはコンテクストが絶えずあるわけで，どういうことを目指している大学なのか，学生がどれぐらいいるのか，あるいは基本的にインドネシアの学生が来ている大学なのか，留学生もいるのか，そういったことを教えてください。スラバヤ大学は国立大学ですよね？

スバンディ：はい。

Q：スバンディさんもご存じだと思いますが，日本の名古屋大学もそうですし，世界的にどこの大学もバジェットカットで非常に厳しい状況に置かれています。ですので，スラバヤ大学がどういう状況にあるの

かということをお伺いしたいのと，もう1つ，これは後でいいのですが，初めに佐久間先生からもありましたように，われわれ名古屋大学の教員としては，留学生に対する教育を良くしていきたいという思いが常にあります。文学部の場合は，幸い鎌田先生など留学生担当のスタッフがいますが，いくらそういう担当の人が努力しても，名古屋大学全体としては必ずしも留学生に対して十分なケアをしているとは言えないと思います。今月の10日にもミネソタ大学の方が来て，留学生に対してミネソタ大学がどういうことをやっているのか話されていましたが，ミネソタ大学などがやっていることと比べると，やはり名古屋大学は組織としての対応が十分ではありません。それに対してどういうところを良くしてほしいのかということを，スバンディさんだけじゃなくて，今日出席されている方の中に留学生の方もいらっしゃると思うのですが，皆さんにお伺いしたいと思います。まず初めに，スラバヤ大学がどういう大学で，どういう学生にどのような教育をすることが求められているのか，補足していただければと思います。

スバンディ：はい，ありがとうございます。スラバヤ大学は，2000年まで教育大学だったのですが，2001年からは総合大学になりました。ただ，総合大学になったと言っても，名大みたいな総合大学とは言えません。なぜかというと，まだ教育大学も含まれているからです。大学としては1つですが，プログラム，カリキュラムから見ると，2つの大学になってしまうのです。というのは，教育と関係があるカリキュラムと，教育と関係のないカリキュラムがあるからです。教育と関係があるカリキュラムを取って卒業すると，教育学士になります。教育と関係のないカリキュラムを取った学生たちは，基本的に教育学士を取れません。そうすると先生にもなれないのです。もし教育と関係がないカリキュラムを取って卒業して，卒業した後に本人が「先生になりたいな」と考えると，1年間ぐらい教育と関係がある科目を取らなければなりません。

個人的には，うちの大学の今の状態はぐちゃぐちゃだと思います。なぜかというと，いきなりそういうシステムになってしまって，大学にいる先生たちがまだ十分な能力を持っていないからです。これはすごく大きい問題で，ほかの大学の先生を呼んできたり，非常勤の先生も呼んできたりしなければなりませんが，私はそういうことはよくないと思っています。

カリキュラムが2つになったので学生の人数もどんどん増えています。総合大学になる前はだいたい7,000人ぐらいだったのに，今は倍になりました。1万4,000人とか1万5,000人になってしまって，でも先生はそんなにいるわけじゃありません。学部は7つあります。工学部，理学部，社会学部，経済学部，体育学部，言語芸術学部と教育学部があります。経済学部は今年4年目で，できたばかりです。本部からは，「スラバヤ大学は，他の大きい大学みたいに国際的な研究プロジェクトで競争しなければならない」と言われています。でも，私たち教員の能力をどういうふうにアップさせるかを考えてくれているとは全然思えません。それで私は悩んでいます。結局，自分で何とかしないといけないということです。ですから，国際交流基金のフェロープログラムは，自分でインターネットから探しました。大学は絶対そういう情報を流してはくれません。

Q：スバンディさんは別として，普通の他の学部，例えば経済学部などの授業は何語で行われているんですか？

スバンディ：インドネシア語です。

Q：全部インドネシア語ですか？

スバンディ：はい。もちろん英語学科とかドイツ語学科，日本語学科は別で，日本語学科はできるだけ日本語で授業をやります。

司会者：スラバヤ大学は，大学の規模としてはどれぐらいなんでしょうか？　インドネシアにはいくつ大学があるんですか？

スバンディ：全部で117校もあります。うちの大学も，できればインドネシアの大学の中で10位以内に入りたいのですが，そこまではいっていません。

Q：日本語学科の卒業生で高校や中学校の先生になる人もいるということですが，高校や中学でも日本語の授業があるんですか。

スバンディ：はい，そうですね。スラバヤは，日本語を教えている中学校，高校がインドネシアで2番目に多い県です。一番多いのはやっぱりジャカルタ州都ですが。スラバヤというのは東ジャワですね。東ジャワ全部で，高校と中学校はだいたい180校ぐらいあります。

Q：どの学校でも日本語の授業があるんですか。

スバンディ：日本語科目というのがあって，週にだいたい2回で5コマです。

Q：どの生徒も受けるんですか？　それとも選ぶことができるんですか？

スバンディ：高校には理系のクラスと社会学のクラ

スと言語クラスがあって，その 3 つの中から選びます。言語クラスと社会学クラスには第 2 外国語という科目があって，今はほとんど日本語です。

Q：第 1 外国語は英語ですか？

スバンディ：そうです。日本語は社会学クラスと言語クラスで教えていますが，理系の学生でも，希望があれば日本語の授業を受けることができます。最近は選択科目として，中学にも日本語科目がだんだん増えてきています。この間，スラバヤ市教育省から電話がかかってきて，小学校向けのカリキュラムを立ててくれないかと言われました。

Q：今日ここにいる人の中には，大学の先生になりたいと思っている人も多いと思うので，インドネシアではどういうふうにして大学の先生になるのかという話をしてもらえませんか。そこはやっぱり関心があるでしょうから。

スバンディ：残念ながら，インドネシアで大学の先生になるためのシステムは，私から見ると良くありません。なぜかというと，応募した人の能力を見ずに，どういう関係の人なのか，それを最初に見るからです。こういうシステムは良くないと思います。もちろん，とても頑張っている先生もいて，反対することもあるのですが，リーダーがいいと言うとそのまま通ってしまうので，私も 2 年間とても大変でした。

Q：例えば，資格とか学位は必要なんですか。試験があるのかないのか，そういうことも教えてください。

スバンディ：試験は必ずあります。ただ，本当にその試験の結果で決めているのかどうかは，私にもわかりません（笑）。

Q：学位は必要ないんですか。海外の高等教育機関で学位を取ってくるというのは必須というわけではない，ということでしょうか。

スバンディ：学位があってもなかなかそんなに簡単には採用してもらえません。さっきも言いましたが，採用する人たちとどういう関係があるのかが大切なので（笑）。でも，今年からは学位の条件ができました。去年までは学士でも応募できたのですが，今年からは修士でないと応募できなくなりました。

Q：今は修士号が必要になったということですか。

スバンディ：そうです。だから日本語学科で勉強している学生たちにも，できるだけ学士で終わらず，進学して修士を取るようにと，必ず授業のときに言っています。

Q：日本語学科の教員数や構成がどのようになっているか，何人いらっしゃるかということと，ネイティブの先生はいるのか，JICA や国際交流基金からの派遣があるのかないのか，あるとすればどのぐらいの頻度で何人ぐらいいらっしゃるのかということが聞きたいです。

スバンディ：まず日本語学科の学生の人数ですが，毎年 2 クラスで，1 クラスはだいたい40人です。そうすると毎年80人で，1 年生から 4 年生までだと 80 × 4 。だいたい350人ぐらいいる計算になります。ただ，最初は 1 クラス40人なんですが，だんだん，30 人くらいになってしまいます。

Q：減ってしまうんですか？

スバンディ：はい。退学してしまうんです。「漢字が難しい」とか言って（笑）。

Q：よその学科には移れないんですか？　日本語学科をやめて，英語をやりたいとか。

スバンディ：そういうときは，まず日本語学科の学科長が英語学科の学科長と話し合って，もし OK なら移れますけど，向こうも満員なら退学になります。そうすると私立大学に行ってしまいます。

Q：入学試験を受けないで？

スバンディ：いえ，またその私立大学の入学試験を受けて。

Q：そうですか。それで，日本語学科の先生の数は？

スバンディ：日本語学科の先生は全部インドネシア人です。16人もいるのですが，今は 6 人が日本にいます。それに，2 人はインドネシアにある大学院に進学しているので，今日本語学科には 8 人しかいません（笑）。日本人の日本語の専門家は，毎年，国際協力基金から必ず一人いらっしゃいます。最初は 2 年間の契約ですが，1 年ぐらい延長してもらって，だいたい 3 年間いてもらっています。さっき最後の写真で見せましたが，今は山下先生という方がいらっしゃいます。それ以外に，私がいたときは，スラバヤにいらっしゃる日本人の奥さんたちにボランティアとして助けてもらっていたのですが，いつでもお願いできるとは限らないので，やはり専門家の数は足りないのではないかと思います。ボランティアの先生たちはだいたい週に 5，6 人から 8，9 人ぐらいで，基本的には女の方なのですが，2 人男の人もいます。70歳の山本先生という方は，インドネシアの，特にスラバヤが大好きになってしまって，「人生終わるまでスラバヤに住みたい」（笑）という感じなので，そういう人もいらっしゃるから，私はとてもありがたいなと思っています。

司会者：先生の数がそういうことだと，授業は結構たくさん担当しているんですか？

スバンディ：今年は，多分一番苦しいと思います(笑)。

司会者：だいたい週にどれぐらいですか？

スバンディ：去年までは週に12コマ，だいたい4科目でしたが，今年は倍じゃないかと思います（笑)。だから最近，学生から，「先生，飽きちゃう。毎日同じ先生で」とか「早く帰ってきてー」というメールが入ってきて（笑)。だけど，修論などはメールで相談してくれるので，日本にいても，少しでも学生たちを助けようと思っています。

Q：さきほど言語芸術学部教育開発センターというのが出てきましたけれども，この教育開発センターというのはどういうことをしているところなんですか？これは最近できたものなんでしょうか？

スバンディ：そうです。今まで高校とか中学校とか小学校の先生たちは，教育に関して何か問題や困ったことがあっても，どこに相談しに行ったらいいのかとても困っていたので，言語芸術学部長と私たちが話し合って，困っている人のカウンセリングができるように教育開発センターを作ろうということになりました。学長が「じゃあ作りましょう」ということになったのですが，私が言いだしたことなので，「じゃあスバンディさん，所長になってください」と（笑)。これは今年の3月にできたばかりです。同じ3月に私の国際交流基金の研究フェローの結果も出て，私はすぐ日本に来てしまったので，自分でもすごく悪いことをしたなと思っているのですが，教育学部の的場先生と一緒に勉強している授業研究など，私が今日本でやっていることは，すぐにメールでみんなに報告しています。これからは特に，言語教育と芸術教育に関して，どういうふうにそれぞれの教育をよくしていけばいいのかということを研究したり考えたりするつもりです。

司会者：このセンターのスタッフはどれぐらいいるんですか。

スバンディ：言語芸術学部には7学科ありますので，それぞれの学科から1人ずつの7人です。

司会者：さっき，教材の紹介の中で，日本のドラマやマンガが出てきましたが，インドネシアでは普通に見られるんですか。

スバンディ：そうですね，最近インドネシアでは，日本のドラマや日本映画，アニメはすぐ手に入ります。DVDとかVCTとか。日本にはないと思いますが，インドネシアにはVCTというバージョンがあります。これはDVDの下のバージョンです。最近は，インターネットもあちこちでつながっています。

Q：スバンディさんがいらっしゃる大学の学生さんはほとんどスラバヤ出身の人なんですか。インドネシア語にもスラバヤ弁とかあるんですか（笑)。

スバンディ：そうですね。うちの学生はほとんどが東ジャワ出身です。スラバヤだけじゃありませんが，東ジャワからがほとんどです。ただ最近，カリマンタン，ブルネオやスラベシなど，いろいろな島からの学生もだんだん増えてきています。スラバヤ弁ももちろんあるのですが，他の方言とそんなに違うわけではありません。イントネーションと語彙が少し違いますが，そんなに変わらないので，ほとんど通じると思います。

Q：さっき聞いたことと関わるのですが，シンガポール大学は，今，授業が全部英語ですよね。インドネシアではそういう動きはないんですか。

スバンディ：去年から国際レベルの学校ということが言われています。もちろん国際レベルと言うには，授業を英語で行うだけではなくて，それぞれの授業の質なども重要ですが，基本的に英語で授業を行うところは小学校から高校まで結構あります。だから，英語の能力がないと，スラバヤ大学の卒業生でもそういう学校の先生になることはできません。それで，今年から理学部に英語で授業を行うクラスができました。国際的なレベルの学校の先生になるために，そういう用意をしているのです。ただ，そういう学校は授業の質だけじゃなくて，お金も高い。授業料が高いのでお金がかかります。

司会者：インドネシアの教育についても，まだ質問がいろいろあるかもしれないですが，周藤先生に先ほどまとめていただいたように，留学生教育ということも今日の一つの大きなテーマですので，そちらの方に少し話を移していきたいと思います。スラバヤ大学は名古屋大学と協定を結んでいるので，名古屋大学に留学している学生もいるんですよね。

スバンディ：はい，今年も2人います。

司会者：スバンディさんは，今は学生を送り出す立場ですが，昔はここで勉強されていたので，そういうことも踏まえて，何か名古屋大学の留学生教育に関して感じていることがあれば，ちょっとお願したいと思います。

スバンディ：私がいた時は留学生がこんなに多くなかったので，やっぱり人数が多くなると雰囲気もちょ

っと変わってくるのではないでしょうか。変わるというのは，いい意味もありますし，よくない意味もあると思います。人数が少なければコミュニケーションがとりやすいですが，多過ぎると，同じ学部で同じ留学生なのにお互い知らないなんてこともあると思います。だけど多分，名古屋大学は留学生を増やすことを目指しているんですよね。

司会者：名古屋大学もそうですが，国全体の方針で留学生を増やさないといけないという状況なので(笑)。せっかくなので，留学生の方からも何か質問はないでしょうか。

Q：授業を担当する以外に，卒論と修論の指導もするということでしたが，修論を書く学生は日本語が専門なんですか。

スバンディ：卒業論文の場合はもちろん日本語学科の学生たちですね。修論の場合は，うちの大学の卒業生だけではなく，いろいろな大学の日本学科の卒業生も進学してきます。どちらにしても，修論のテーマは日本語と関係があるので，私たちが指導することになっています。

Q：修士号がとれたら，スラバヤ大学の先生になる資格が得られるんですか。

スバンディ：そうとは限りません。さっき言いましたように，大学の先生になるためのシステムがいろいろありますので，簡単になれるとは限りません。そもそも大学の先生には修士号を取っていない人もいるのですが，そういう時は，私みたいに留学させていただいて，学位を取ったら元の大学に戻るということもしています。

Q：留学生として名古屋大学で学んで，母国へ帰って教壇に立つというのは，やはりわれわれ教員としても非常にうれしいことだし，多くの留学生に，そういうふうになってほしいと思っているわけですが，スバンディさんも，名古屋大学で勉強しているときに，いろいろ困難や問題があったと思います。例えばスバンディさんは，博士論文を書かないといけなくて，博士論文を書くときもいろいろ苦労があったと思うのですが，どういう苦労があったんでしょうか。それから，そういう困難があったときにどうすればよいのか，何か後輩に向けてアドバイスがあればお願いします。

スバンディ：すごく苦労しました（笑)。なぜかというと，私は夫婦で留学していて，さらに子どもが1人。2人とも奨学金をもらっていなかったですから。

それと日本語の問題がありました。町田先生，佐久間先生，宮地先生がいなかったら死んでしまったかもしれません（笑)。ただ，私には日本に来る目的がありました。博士の学位だけじゃなくて，勉強したことを向こうに帰って学生や他の人たちに伝えるという目的があったので，苦労しても，いろいろな先生や先輩から支えていただいて頑張りました。

やはり日本語の能力は一番問題だと思います。なぜかというと，「実は私はこういうことをしたいんです」と伝えたいのにうまく伝わらない。日本人の先輩に言い直してもらって，「こういうことですか，スバンディさん」「そうかも」(笑)。でも，私が言いたいことは，本当はそういうことじゃないということもありました。私には日本語が一番難しい問題だったと思います。たださっき言いましたように，目的がありましたし，いろんな人に相談に乗っていただいたおかげで乗り切れました。

Q：ちょっと確認したいのですが，科学的な科目と技能的な科目はみんな学部生向けの授業なんですか。

スバンディ：さっき言いませんでしたが，私は大学院の授業は担当していません。アシスタントにはなっているんですけど，大学院の授業は先輩たちがやってくれています。

Q：理論的な科目も学部生向けですか？

スバンディ：そうです。私たちは日本語学科なんですが，最初から日本語能力の科目だけ勉強するのではなくて，日本語学と関係がある科目も勉強しないとよくないのではないかと考えて，こういう科目ができました。例えば，「おはようございます」という単語を話すことができても，どういうふうに「おはようございます」を使うのか，それでどういうことが伝わるのか，言語と関係がある文化についても勉強しないといけないと思うのです。学生たちは卒業論文を書かなければなりません。こういう科目をやらないと，卒業論文を書くときにどうしたらいいかわからないですよね。そういう問題もあるので，こういう科目をしっかりやっています。それに，学生たちには学士を取って終わるのではなくて，できれば大学院に進学してもらいたいのですが，院に上がるとき，概論ぐらいの言語学的な知識があると少し楽なのではないかと思います。

司会者：実際，大学院に進学するのはどれぐらいですか？

スバンディ：80人の中で，多くてもまだ10人ぐらいですね。

司会者：進学した人の修士が終わった後の進路はどうですか？

スバンディ：そうですね。最近，新しく日本語学科ができた大学が結構あります。東ジャワだけでも，国立の2つの大きい大学，キッキ大学と，スラバヤより南のマラン大学に日本語学科ができました。そういうところの先生になるわけです。

司会者：じゃあ，修士に行った人はだいたい先生になるんですね？

スバンディ：ええ。大学の先生にならなければ，高校の先生になるんです。

Q：ジャワ地域では，中学校や高校でも日本語を第2外国語として選択している学生が結構多いということでしたが，大学に入って，また「あいうえお」から習い始めるんですか？

スバンディ：日本語学科に入ってくる学生は日本語を勉強したことがある学生ばかりではありません。日本語を勉強したことがない可能性もあるので，必ず，平仮名，カタカナ，「あいうえお」から始めなければならないんです。英語の場合は，どこでも小学校3年生から始めるのですが，第2外国語，例えば日本語や中国語はすべての学校でやっているわけではありませんから。

Q：つまり大学に入った学生たちは，日本語を習っていたとしてもそんなにレベルが高いわけではないんですね？

スバンディ：はい。高校で勉強したことがある学生は，平仮名，カタカナなら書けます。「日本語初歩」の第5課くらい，例えば「私はお金がありません」「何々がありません」「何々があります」ぐらいは分かります。

Q：高校で日本語を習った人とそうじゃない人は別々のクラスで教えるんですか？

スバンディ：最初はクラスを分けたのですが，そうすると，勉強していなかった学生から文句が出たんです。なぜかというと，「できる学生と接する機会がなければ，できる学生から勉強することができない」というんです。

Q：刺激がないと上達できないということですね。

スバンディ：そうです。結局クラスは区別しないことにしました。逆に，高校で勉強しなかった学生たちに，授業の後，週2回ぐらい，平仮名や「これは何ですか」という日本語初歩をもう1回教えています。

Q：そうすると，高校で習った人にとっては，最初の1年間か2年間は時間がもったいないということにはなりませんか。

スバンディ：そうですね。でも，高校で勉強する日本語のレベルは，大学1年生の前期のレベルに届かないと思います。高校で勉強する日本語のレベルはとても低いので。

Q：ということは，インドネシアの中学校や高校で，日本語が割と高いレベルに到達できる学校はないんですか？

スバンディ：あるにはあるのですが，日本語の場合，英語みたいに高いレベルではないんです。日本昔話ぐらいでもちょっと難しいかもしれません。「これは本です」「机の上に本があります」，それぐらいなんです。ですから，大学に入って3カ月ぐらいたつと，勉強したことのない学生とレベルが同じになってしまいます。

Q：私も専門学校と高校で日本語を教えたことがありますが，確かに，高校や専門学校で教えられる日本語のレベルはとても低いですね。なぜかというと，専門学校だと文法的なことより話す力が重視されるからです。なので，ほとんどの授業は，会話的なものを使って学生たちに暗記させる形なんです。

スバンディ：日本語能力試験がありますね。高校生が4級に合格すると素晴らしいという感じです。4級はあのレベルなんですが，それでも，「うわー，どこの高校ですか」というくらい本当に目立ちます（笑）。

Q：その話でちょっと気になったのですが，どういう基準で大学に進学するんでしょう？　高校で日本語を教わった学生は，試験なしで日本語学科に入れるんですか？

スバンディ：インドネシアで大学に入るシステムは2つあります。まず，専門的な学科，例えば日本語学科に入る場合，入る前に日本語を勉強したことがある人たちだけを受け入れます。このシステムで入る時は，普通の入学試験は受けず，日本語の試験の成績で決めます。うちの大学ではだいたい1年間に10人，日本語の成績がいい学生を受け入れています。2番目のシステムは，日本のように入学試験を受けて入ります。この場合は，日本語を勉強したことがある学生だけじゃなくて，勉強したことがない学生も受けることができます。なぜかというと，入学試験はだいたい英語，数学，社会だけなので。

Q：大学の入学試験は，国家試験ではなくて，大学ごとの試験なんですか？

スバンディ：国家試験です。ただ，さっきの「日本語の成績がいい」10人の学生だけは，日本語のレベル・能力を見て，国家試験を受けずにそのまま入ることができるのです。そういうシステムで入る学生たち

の方が，日本語学科の中では必ずレベルが上です。

Q：国家試験で大学に入れる点数は国が決めているんですか？　それとも大学によって異なるんですか？

スバンディ：国家試験の場合は，本部が決めているので私たちにはわからないですね。結果はインドネシア文部科学省のウェブサイトや新聞で発表されます。入学試験を受けず日本語能力だけをみる試験は，私たちが作っています。

Q：スラバヤ大学は卒業生に対してどのような日本語能力を求めているんですか？　具体的にいうと，日本語能力試験検定の成績とか。

スバンディ：2005年から，私は日本語能力試験の東ジャワの委員長になったのですが，うちの大学では２級を目指しています。でも，やっぱり２級は難しいですね。２級に合格する学生はまだ少ないです。

Q：学校側としては，何も決まりがないのですか？何級にパスしないと卒業させないというような。

スバンディ：教育実習２のプログラムをする時は，必ず日本語能力試験３級に合格していないといけないという条件があります。でも，高校の先生になるには３級ぐらいのレベルで十分で，２級まではいりません(笑)。ですから，卒業の条件にはならないですね。

Q：２級に合格させるためにどんな取り組みをしているんですか？

スバンディ：やっぱり授業だけではなく，私が週２回ぐらい文法と漢字の補習をしています。忙しくなりますが，学生のために頑張っています（笑)。

Q：インドネシアの社会では，どのくらいの日本語能力が求められているんですか？

スバンディ：やっぱり韓国や中国の方が高いんじゃないですか。これは漢字文化の問題もあると思います。能力試験を受けるには漢字を読めないといけませんし。中国人や韓国人の場合は漢字で意味が分かるから，読めなくてもだいたい内容が分かるんです。インドネシア人はそういうことがないので，やはりレベルが低くなってしまいます。うちの学生でも，中国系の学生はやはり日本語の成績が一番高いです。

Q：そのギャップを乗り越えるための努力は？

スバンディ：さっきも言いましたが，週２回ぐらい，他の先生と交代で勉強会みたいなのをしています。ただ，必ず出席しなければならないわけではないので，「出たい人は出てください。自分の能力をアップさせたい学生は来てください」という感じです。来る人もいるし来ない人もいるし，途中でさぼる人もいます。とても頑張ってくれる学生もいて，漢字能力の大会があるのですが，おかげさまでうちの大学は３年連続中級のレベルで優勝しました。

Q：日本に来た留学生は，帰国すると日本語の先生になるという人が多いんでしょうか？　例えば日本文学を学んで，日本文学を向こうで教えるという方はいらっしゃるんでしょうか？

スバンディ：多分，日本文学や日本史学，東洋史学を専攻しても，国に帰るとメーンの仕事は日本語を教える仕事ということがほとんどだと思います。研究は自分の研究としてやって構わないし，そういう授業を少しはやってもいいのですが。

Q：スバンディさんはうまく向こうの大学の先生になれたわけですが，なれない可能性もあったわけですよね。日本に来て勉強されて，もしも大学の先生になれなかったら，といったことは考えましたか？

スバンディ：私の場合は，留学する前からもう大学の先生に決まっていたんです。私は，最初から大学の先生をしたいと思っていました。そして，大学の先生になってから留学したいと思うようになりました。留学が終わって元の大学に戻って，日本にいる間に勉強したことを向こうの学生たちに教えることができるのは，すごく幸せなことだと思っています。

Q：私もイギリスに留学しましたけど，留学して日本へ帰れば仕事があるかなと思ったら無かったんです(笑)。それでしばらく浪人生活みたいなものもしたりして，結局ここに落ち着いたのですが。だから大変だなと思いますね。やっぱり。

司会者：さっき，博士論文を書くときに，日本語を先輩に見てもらったということでしたが，スバンディさんがいた頃も論文作成支援のチューターがついていたんですか？

スバンディ：ありました。修士課程の時は，宮地先生の同級生の加藤さんという先輩がチューターでした。加藤チューターは，そのあともずっとチューターみたいなことになってしまって。博士課程でも，町田先生と佐久間先生に見てもらう前に，加藤さんと宮地先生にまず見てもらっていました。

司会者：そういう意味では，最初チューターについてもらった人といい関係が続いたということですね。

スバンディ：そうですね，はい。

Q：これは全く関係ない話ですが，例えば英語で論文を書く時に，こういう英語の表現をするかなと思って，英語のネイティブがいなかったらどうするかといいますと，インターネットのヤフーなどの検索でその英語の表現を入れてみるんです。それでヒットするの

が多かったら使うと。多分日本語についても，同じことができるんじゃないでしょうか。

スバンディ：私もやったことがあります。でも，その時チューターに「これ，日本語がおかしい」と言われました（笑）。

司会者：それはやっぱり相談できる日本人がいた方がいいですね。

Q：私は学生の頃，今でもですが，話す力がなかなかつきませんでした。そういう問題を克服するために，スラバヤ大学ではどういう取り組みをされているんですか？

スバンディ：うちの学生たちもすごく悩んでいます。それで，授業のときだけではなくて，大学にいる間はできるだけ日本語で話をすることにしています。学生たちが考えたんですが，例えば週3日ぐらい日本語で話す日を決めて，日本語で話さないと罰金という，そういうシステムがあるんです。学生たちが話し合って決めたことですから，それで構わないと思っています。日本語を話す能力をアップするためですから。私たち教員も，学生と話をする時は，学生たちのレベルに合わせた日本語で話すようにしています。それと，さっき写真で見せたように，スラバヤにいらっしゃる日本人の方たちにいろいろサポートしてもらっています。こっちは毎週1回，水曜日に会話会をやっています。日本人と接する時はできるだけ日本語で話すようにさせています。「もうインドネシア語は忘れて下さい」といつも言っているんです。日本に留学する学生にも必ず注意します。名古屋にもインドネシア人が結構いるのですが，「できるだけインドネシア人と接しないように。インドネシア人同士でいるとインドネシア語で話すから，日本語の練習にならないよ」と言っています。

Q：罰金ということでしたが，私の大学では，同じことをやってもなかなか効果がでません。なぜかというと，みんなが約束を守らないからです。授業は完全に日本語でやっているんですか？

スバンディ：そうですね，私は，基本的には簡単な日本語でやっています。ただ1年生には，特に高校で勉強したことがない学生の場合，簡単な日本語でも難しいようです。「先生，何て言ったんですか」と，よくそういう質問をされるので。それで，たまにインドネシア語を使うこともあります。ただ基本的には，できるだけ日本語でコミュニケーションをとるようにしています。授業の時や普通の会話の時は日本語でやりましょうということです。やっぱりモチベーションがないとうまくなりません。学生には，「あなたが日本語を勉強する目的は何ですか。日本語が全然話せなかったら，卒業しても困るじゃないですか」と言っています。そこからモチベーションが生まれてくるんじゃないかと思います。

司会者：最初人数が少なかったので心配したのですが，最終的にはいろいろ意見が出てよかったと思います。文学研究科の留学生教育に対する注文はあまり出ませんでしたが，教員の前ではちょっと言いにくかったかもしれません。また別な形で意見を聞きたいと思いますので，遠慮せずにどんどん注文してください。それでは，スバンディさん，どうもありがとうございました。

（拍手）

司会者：きょうのワークショップはこれで終わりたいと思います。お忙しいところどうもありがとうございました。